

東北官衙・東方官衙北 地区の調査

—第108-11次

1 はじめに

本調査は、榎原市高殿町の角田池の東を北流する高所寺川の改修にあたり、東に隣接する市道の拡幅工事に伴って実施した事前発掘調査である。2000年度の道路拡幅工事は幅2.5m、延長200mにわたり計画され、拡幅予定地のうち、電柱等で調査が困難な部分を除くほぼ全域を調査した。調査地は、藤原宮の東方から東北方にかけての官衙地区に位置する。調査は2000年11月27日に開始し、12月20日に終了した。調査面積は約470㎡である。

調査区が南北に長くわたるため一概にはいえないが、基本的な土層は、上から、①旧耕土ないし旧耕土を含む現路盤土(厚さ20～40cm)、②旧床土(厚さ約30cm)、③灰色～橙灰色砂質土層(厚さ約20cm)、④黒褐色粘質砂～砂質土層(厚さ約10cm)、⑤青灰色シルト～砂層(地山)が堆積し、遺構は④層あるいは⑤層上面で検出した。遺構面は概ね現路面下60～80cmにある。

2 検出遺構

検出した主な遺構には、掘立柱南北棟建物3棟、掘立柱東西堀1条、東西溝2条、土坑多数、耕作溝多数などがある。掘立柱南北棟建物3棟、掘立柱東西堀1条、東西溝2条は、藤原宮期ないし宮造営直前に属するとみられる。また、土坑の一部には、古墳時代ないし弥生時代にまで遡るものがある。

掘立柱建物SB9270 調査区南端付近にある南北棟建物。方位はほぼ国土方眼にのる。建物の西半部、すなわち北妻1間分と西側の桁行4間分を検出したが、南端は近世の大土坑により攪乱を受けているため、不明。柱間寸法は桁行2.8～2.9m、梁行1.6～1.7m。柱掘形は一辺約1m、残存する深さ約0.4mである。柱穴からは土師器杯A、土師器杯C(飛鳥Ⅱ～Ⅲ)などの土器が出土した。後述のSB9280・9285との関連は不明。

掘立柱建物SB9280・9285 調査区北部に南北に並んで建つ2棟の南北棟建物。方位はほぼ国土方眼にのる。ともに西側柱列の柱穴のみを検出した。両建物は西側柱筋を揃えており、間隔は約3mある。いずれも桁行8間の規模を有し、北の建物SB9285は柱間2.6mで総長20.8m、

南の建物SB9280もほぼ同じ規模とみられる。SB9285の柱掘形からは、飛鳥ⅣないしⅤの須恵器蓋片が出土している。柱筋を揃えるところからすると、同時期の建物であろう。

掘立柱堀SA9275 SB9270の北約4mに位置する東西堀。1間分を検出しており、柱間寸法は1.6～1.7m。検出長が短いため確実ではないが、方位はほぼ国土方眼にのるものと思われる。SB9270と同時期か。

三条大路北側溝SD2420 調査区の南寄り、三条大路北側溝を検出した。幅2.7m、残存する深さは約1mである。埋土は、上から灰褐色土層、灰色粘土層、青灰色粘土層の順に堆積する。灰褐色土層を中心に、平瓦3.8kg、丸瓦1.2kgと比較的多数の瓦片が出土しており、今回の瓦出土量全体の約1/3に達する。土器は、灰褐色土層から須恵器杯B(飛鳥Ⅲ～Ⅴ)・須恵器杯蓋(飛鳥Ⅳ～Ⅴ)、灰色粘土層から須恵器杯H(飛鳥Ⅰ)・須恵器杯蓋(飛鳥Ⅳ・Ⅴ)、青灰色粘土層から須恵器杯蓋(飛鳥Ⅰ～Ⅳ)などが少量出土している。なお、三条大路南側溝は北側溝心から9m(25大尺)南に想定されるが、電柱が設置されていたため、確認できなかった。SD2420は、東方約30mの場所であつて実施した藤原宮第27次調査においても検出されているが、幅約1.1m、深さ約0.3mと、今回検出したものよりかなり小規模である。

東西溝SD9290 調査区の北端付近で検出した溝で、SB9285の北約5mに位置する。幅約1.7m、残存する深さ約0.6m。埋土は、上から炭混灰黒褐色砂質土層、黒褐色砂質土層、青灰褐色粘土層の順に堆積している。埋土からは、土師器鉢A(飛鳥Ⅲか)を含む土器が少量出土した。

土坑SK9283 調査区の中央部で検出した不整楕円形を呈する土坑。西端部は調査区外となる。東西長1.2m以上、南北長0.7m、残存する深さ0.2m。埋土は炭混じり暗灰褐色土である。土坑の底面から、瓦当の頸部分を欠失するほかはほぼ完存に近い軒平瓦1点が、瓦当面を南に向け、凹面を下にした状態で出土した。ほかに、須恵器杯A(飛鳥Ⅴ)など、少量の土器が出土している。

今回は、狭長なトレンチ調査にもかかわらず、全長20mにも及ぶ長大な南北棟建物が検出でき、また、三条大路北側溝の規模についても新知見が明らかとなるなど、重要な成果が得られたといえる。(小池伸彦)

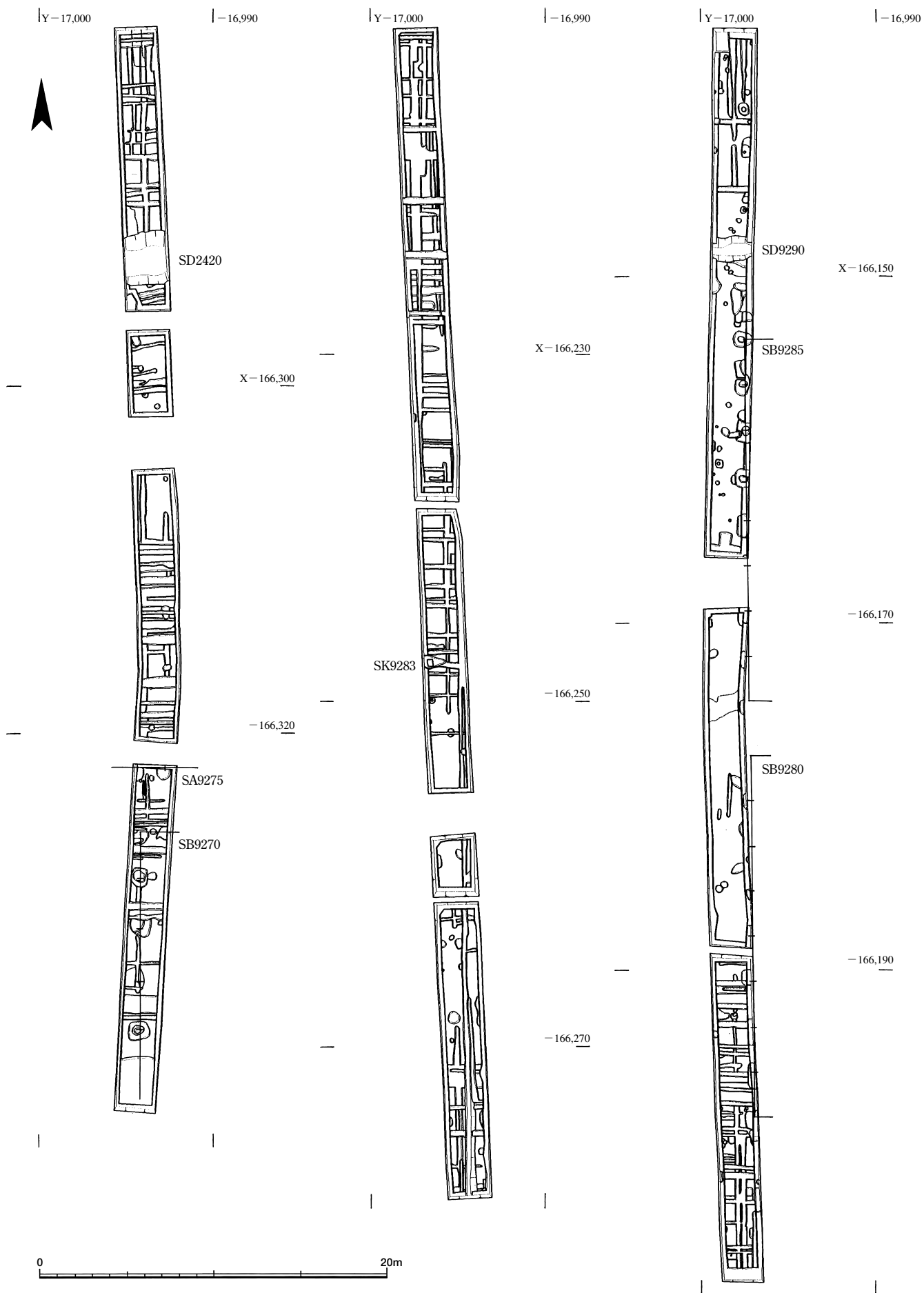


図66 第108-11次調査遺構図 1:300